



日韓合同授業研究会会報

第 123 号

2020年8月31日発行

コロナと学校

藤田

2020年2月27日木曜日、ある会合の最中にスマホを見ていた誰かから、翌日を最後に休校になることが知らされた。首相がそのように言ったというのだ。

28日金曜日、朝から職員集合があり、校長から当日学習道具、作品、プリント類は全て持ち帰る。持ちきれない物は、別に登校日を設けるか、保護者に取りに来てもらうようにする。終業式、卒業式は未定などの連絡を受けた。

その日3年1組は、図図外国算（少人数）国体という時間割で時間がない。外国語をなしにしてもらって、1・2校時に急いで返却するものを確認し、最後の学級通信を印刷。3時間目に状況を子どもたちに話し、返却・配布をしたりした。5時間目にやり残した学習、家庭学習について説明。6時間目の体育館での体育は、お別れお楽しみ会に変更。増えオニ・ドッジボールをしたあと、ギターの伴奏でみんなの大好きな歌を歌った。（今思い出すと、あのときはまだ歌えた。）教室に帰って、「元気だね」と話すと、女の子が「先生、涙がでてきちゃった。」というので、「こんなときは、笑え。」などと乱暴に答えた後、下校となった。教室に残っている子たちが窓から外を見ているのでのぞいてみると、6年生を送る会のために各クラスが作ったスローガンのパネルを5年生が持って校門前に並んでいる。残っていた3年生も急いで列に加わり、6年生の下校を見送った。自然発生的に、6年生を送る会で6年生のために歌うはずだった歌を大きな声で歌った。その中をたくさんの荷物を持った6年生が通っていった。

休校が続き、3月末、通知表を渡すために短時間の登校日が設けられた。卒業式は、保護者や教職員、来賓の人数を限定し短時間で行われた。校歌はなし。「国歌」は、音を流したり、歌われたりしたところもあった。特に都立高校では、歌うように都教委から指示が出ていた。10・23通達以降処分を伴う厳しい締め付けの中で、上に従うことに慣れてしまった学校は、校歌が歌われなくても「国歌」が歌われるという異常さに何も感じなくなっていた。

月曜日に行われるはずの入学式は、コロナ対策のために知恵を尽くして準備されていたが、金曜日の夕方4時過ぎに連絡が入り中止となった。副校長は、「私の1週間返して。」

目次

コロナと学校	1
戦後学習指導要領体制の終焉	5
清見寺あれこれ	10

と思わず口に出した。自治体によっては、入学式を実施したところもあり、保護者からも批判を受けていた。

3月までは、家庭学習は授業ではないということで、3月やり残した学習を家庭学習でやらせてはいけないと言われていた。そこで、2月末までに学習したところの復習や残っていたテストが家庭学習となった。ところが4月に入り、家庭学習を授業として認めるといふ。時間割をつくり、毎日6時間の授業としての家庭学習計画を出すように指示が出て、急遽週案をつくることになった。大量のプリントづくりに追われ、配布の仕方を検討した。クリアファイルを2枚ずつ用意し、登校日ごとにマルつけを済ませたプリント、新しい課題を靴箱に入れ、子どもから課題を済ませたプリントを受け取るということになった。受け渡しも原則、教員は手にふれないで、もし手にふれたときには消毒するということが確認された。また、1週間に2回（都教委からは1回という指示だった。）家庭に電話をし、子どもの状況を確認した。

最初の週の電話掛けでは、保護者からの苦情が多数あった。それはそうだろう、今までほとんど進められていなかった学習をいきなり始めたのだから。道徳や音楽などなぜやらなければならないかとの声もあった。家庭環境によってはリコーダーの練習は困難だった。働きに出ている家庭や自宅勤務がぎっしりとある家庭では、対応できないところがあった。2週目からは、内容を減らすようにしたが、プリント学習で新しい学習内容を理解することには限界があり、家庭で学習を助けてもらえる家庭とその余裕のない家庭では大きな差が出ることは予想された。家庭学習が難しそうな内容は避け、丁寧な説明を心がけてプリントを作るようにした。

「授業時数としてカウントされる。」と聞いていたことも、時間と共にトーンダウンし、「授業時間として少しでもカウントされるように進めるように。」となっていた。どこを目指して学習計画を立てるのが曖昧なまま、翌週の準備とマル付けに時間を費やしていた。

オンライン授業をしてほしいとの要望も出されるようになった。もともと文科省はGIGAスクール構想を打ち出し、新指導要領でもプログラミング教育が必須となっていた。GIGA (Global and Innovation Gateway for All) スクール構想とは、「児童生徒向けの1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備し、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化された創造性を育む教育を、全国の学校現場で持続的に実現させる構想」とされ、莫大な予算がつき込まれることになっていた。世田谷区の中学校では、タブレットとWi-Fi機器を貸し出すなど、宿題の配布提出をオンラインでできるように進められていた。企業主導の政策ではではないかとの批判もあったが、コロナを追い風に政策を進めている。実際は自治体ごとの導入計画をサポートするというものであり、自治体の経済的状況により格差が生まれている。

オンライン授業は保護者からも要望があったが、一朝一夕に導入できるものではない。特に小学校の学習は、「アクティブラーニング」を謳うように、一方向の知識を伝えるだけでなく、体験や身体的活動を通して感覚を磨いたり、物の見方を育てたりする部分が多い。ハード面がそろったとしても、教育方法として確立するためには、教員の試行錯誤が必要であり時間がかかる。

これまでもICTは進められてきてはいる。「デジタル教科書」がすでに全校に配られている。しかし、「デジタル教科書」のように作られたソフトは応用性に乏しく、創造的な授業を生み出しにくい面がある。実際、大型テレビが設置されている教室では、「デジタル教科書」より、実物投影機の方が圧倒的に多く使われている。実物投影機は、かつて使われていたOHPより使い勝手がよく、教材提示や子どもの作品を共有することが

容易にできる。

家庭環境の大きな課題となっている。個別の部屋があり、生徒が自分の個別の機器を所有していなければ、兄弟や保護者がオンライン授業やオンライン業務を行っている場合、困難である。また、小学生では、保護者が家にいないとパソコンを使えないという家庭も少なくない。

不登校の子ども達の中にもオンライン授業を求める声がある。再び休校という事態になったときに備えて、オンライン授業の準備を進める必要もある。しかし、実現に向けてはハードルがいくつもあり、準備を進めるべき教員は、日々の業務に加えて消毒等のコロナ対応に追われてあまりにも余裕がない。教員の「やる気」の問題にされてもと考えてしまう。実際担当の教員を配備しないと無理なのではないか。

コロナ休校中の休校が続いた5月29日、ニュースではブルーインパルスが病院関係者を励ますために飛行したと流れた。実際は一般の都立病院ではなく、自衛隊病院の上空での飛行だった。マスコミを通して、災害の度に自衛隊の活躍が印象付けられている。指導要領改訂を受けて、今年新しくなった小学校4年生の教科書には、災害で活躍する自衛隊の姿が書かれている。また6年生の教科書では、自衛隊の役割を「国の防衛」「国際協力」と強調するところも出ている。

この夏、中学校の教科書採択が各自治体で進んでいる。2001年以来「つくる会系教科書」を使用していた東京都立中学校や横浜市、藤沢市が育鵬社以外の教科書を採択した。教科書展示会に足を運びアンケートに記入したり、教科書採択の会議を傍聴したりという地道な運動が実を結んだものと思われる。教科書展示会場を増やしたり、傍聴者を収容できるように大きな会議室を使うように要求したりする運動も粘り強く展開されてきた。

「つくる会系教科書」とは現在は育鵬社歴史・公民教科書、自由社公民教科書や日本教科書道徳教科書を指すが、それ以外の教科書も、日本会議神奈川の上田和副運営委員長が「この20年で、あまりに左寄りの記述には批判が起き、各教科書会社も敏感に反応するようになった。つくる会の運動には大きな意義があった。」と述べているように、法律や制度の変更により教科書の自主的な編集が損なわれ、教科書同士の差が減り、保守系の人物であっても無理に「つくる会系教科書」を選ぶ必要がなくなっていると言われている。

6月になり分散登校が始まった。自治体によって方法や時期は違っていたが、私の勤務する区では、最初は週2日、三時間ずつA、Bに分かれた子どもたちが登校した。翌週は一日交代、次は午前と午後で交代となった。子どもが下校した後、消毒作業が入り、午前午後の分散では食事をとる間もないような状況だった。また、授業の形態がコロナ対策で制限され、ずっと教員が一方的に話し続けることも多かった。この状況下でできることを考え、遅れている学習を効率的に進めるための工夫を話し合い、試行錯誤が続いていた。

この時期、教員も体力的に厳しかったが、子どもたちも下校時に、「今日は、楽しかった。」と聞くと、「楽しかったけど疲れた。」と答えた。長い間、きちんと机に座ることのなかった子たちの姿勢はひどく崩れていた子が多くいた。文字の乱れも目立った。授業中の私語は少なかったが、新しいクラス、新しい担任の中で緊張していたことと、長い家での生活の中でまだぼんやりしていたことによるものだった。新聞には、骨折する子が多いと書かれていた。体育では、子ども同士接触はもちろんボールや跳び箱などの共有も禁じられ、走ることもくらいしかできないので、エアタッチのリレーやシッポとりをした。

A、Bに分かれての教室は、一人一人に手が届くという良さも感じられた。普通の時でもこの人数がいいという教員の声聞こえてきた。7月3日には、全国知事会、全国市長会、全国町村会の地方3団体の代表が、萩生田光一文部科学相と省内で会い、新型コロナウイルス感染の再拡

大に備え、少人数学級に必要な教員確保を求める提言書を手渡した。また、7月28日には、萩生田文部科学相は、日本PTA全国協議会と全国高等学校PTA連合会の代表の意見交換を行った。PTA側からは「教室内で子どもたちが密の状態になっている」「学校内の消毒作業が大変で教員の増員が必要だ」といった意見が出されたことに対し、萩生田大臣は「子どもどうしの距離を確保するための少人数学級や、スクールサポートスタッフのさらなる増員などを検討したい」と述べた。

6月第4週から、普通通りの時程による授業が始まった。給食は段階を踏んで子どもの当番も行われるようになった。はじめは全て教師が配膳をするため、おにぎり一つと1品といった簡易給食だったが徐々に品数が増えていった。使い捨て手袋の着用、全員前を向いてパーテーションを立て、おしゃべり禁止で食べた。といっても子どものこと、おしゃべりを止めるのが難しい。早く食べて本を読んでやったりしていた。パーテーションは、2枚のプラスチック段ボールを組み合わせた簡単なもので、35ℓの袋を机の横に養生テープで張り収納するようにしたが、予想通り次々と袋が破け、その修理が、下校後の消毒と合わせ毎日の仕事の一つとなった。

クラスの全員がそろろうと、子どもたちも自分らしさを発揮し始めていた。学習道具や遊具なども使用前、使用後に手洗いをすれば使用可となり、多少できることが増え、子ども同士の関係は広がっていった。1時間の授業に集中できる力も取り戻され、ノートの手が書き違えるように整った子がたくさんいた。

夏休みの期間は、自治体によってまちまちだった。私の勤める区では、1学期は7月31日まで。2学期は9月1日からとなった。自治体によっては夏休みが9日しかないところもあった。さらに7月22日23日の休日が授業日とされた。保育園が休みとなるため、子育て中の教員から苦情の声が寄せられた。文科省から出された1学期の授業日数の目安を超えているにもかかわらず、多くの自治体でそれ以上の授業日数の確保が求められている。文科省には、指導要領改訂によって大きく増やした指導内容を少なくとも1年先送りにするなど、指導内容を削ることが求められる。「学習補償」はどこまで求めるのかが曖昧なため、教員にも子どもにも負担がかかっている。特に受験内容については、はっきりと範囲の縮小を示す必要がある。

7月に入り、再び感染者が増加してきた。近隣の学校関係者の中からも感染したとの情報が入ってくるようになった。区教委からは区内の学校で感染者が出たとの情報は入るが、校名は伏せられていた。学校を掛け持ちしている講師などから不安の声が聞かされた。校名は翌日、クラスの子どもから聞いた。それはそうだろう。学校を休みにした段階で親たちのネットワークから、あっという間に情報が広がる。子どもを風評被害から守るためというなら、陽性者に対する差別をしないようにきちんと教えることが大切と考えられる。塾や習い事で他校の子と出会うことも多い。区教委は情報をきちんと流してほしいと副校長が言う。

学校関係者が陽性者や濃厚接触者となった場合、保健所の指示により休校などの措置が取られる。その措置は、1回目の感染者拡大時より軽くなっている。当初、2週間休校とされていたが、状況によっては数日、或いは1日だけの休校であったり、学年閉鎖のみであったりしたこともあった。検査結果が出るまでの間は自宅待機となるが、学校のような空間の中で、不安は大きい。特に病気の家族がいたり、本人が病気を抱えていたり妊娠していたりといった場合は特に心配である。「事故欠勤」が認められているが、学校の厳しい状況の中で、なかなか休みにくい。このような場合、管理職が声をかけてほしい。中には休むなら年休を取るように言った校長もいた。

子どもの中にも、学校を休ませる家庭が出てきている。その場合は、欠席ではなく出席停止と

なる。コロナに対しては、それほど心配しすぎなくてもいいという考えの人から、最新の注意をしながら暮らしている人まで多様である。前述のように家庭に病気が人がいたり、医療関係であったりする人など多種多様な背景があり、それぞれの立場を認めていくことが必要になる。

8月からは、補習が始まった。第1週と第4週に行われる。半分くらいの子どもが参加している。教室は換気をしながらの冷房なので相当に暑い。水分補給を呼びかけ、話をしなければマスクをとってもいいと伝える。考えていると今頃オリンピックが始まっていた。アメリカの都合でこの時期を外せないと言われたオリンピックに、東京都中の学校から子どもたちが動員されることになっていた。この暑さで、殺される場所だった。来年、本当にやるのだろうか。

このようにコロナに振り回された1学期であった。2学期以降も同じように混乱が続くことが予想される。このようなきだからこそ、文科省や教育委員会には、何を大事にするのかをきちんと考えて対応してほしいと願う。また、十分に休養できなかった教員たちの健康も心配だ。9月に入って教員がばたばた倒れるのではないかというニュースがあったが、すでに退職者が出ている職場もある。子どもの学びと安全を守る教職員の健康もまた心配になっている。一日も早いコロナの収束を願う。



戦後学習指導要領体制の終焉

善元

1 <君たちの日本の未来は美しい！>—ムーンショット目標—

2020年1月23日、内閣府の発表、「ムーンショット目標」である。ムーンショットとは、「従来にはない、大胆な発想に基づく挑戦的研究開発」、関係省庁が協力して研究を推進する、目標は以下の6つだ。これは単なる民間のSF物語ではない、政府が進める事業である。

目標1：人が身体、脳、空間から解放された社会を実現
目標2：超早期に疾患予測・予防社会を実現
目標3：AIとロボットの共進化、自ら学習・行動し人と共生ロボットを実現
目標4：地球環境再生の持続可能な資源循環を実現
目標5：未利用生物機能等の活用、地球規模でムダない持続的食料供給産業創出
目標6：経済・産業・安全保障を飛躍発展の量子コンピュータを実現

*また、2030年まで、望む人は誰でも仕事を、身体的能力、認知覚能力強化できる技術開発、社会通念を踏まえ、新しい生活様式を提案するという。私たちには約束された未来があるのであるか、未来は美しく輝いているのだろうか！

2 文科省、大胆に「未来の教育」2030年問題を提案

1) 大局を見通す力とは一学習指導要領完全実施（小中学校）をむかえて一

日本はこの30年の科学や技術の急速な変化速度に教育が対応できなかったのではないだろうか。そうした事をふまえ、新学習指導要領の学習内容はどうか、実は今回の改訂ではその準備段階で、学習の内容論議は、かなり大胆に、大きな枠組みで捉えていた。一例を挙げよう。文科省は「教育課程企画特別部会」（2015年7月28日）では「シンギュラリティ*」という概念を持ち出し、大きく教育の舵切りをした。2030年までに予想される技術進歩、いわゆる第四次産業革命を見据えてのことである。現在、民間教育産業で先行実施のプログラミング教育、英語教育などがある。日本の社会が、あらゆる規制を緩和し、教育の分野では1980年代からの新自由主義教育と深い関係がある。これは従来の教育にとらわれることなく、自由に教育体制を考えるものである。

資料* 「教育課程企画特別部会」（2015年7月28日）シンギュラリティ

「2030年の社会と子どもたちの未来」次期改訂に向けて（要約）

(1) 社会の質的变化等と学校教育の課題

- ・グローバル化や情報化が進展する社会では、多様な主体が速いスピードで相互に影響し、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝播し、先を見通すことがますます難しくなっている。
- ・子どもたちが将来就くことになる職業も、技術革新等で大きく変化すると予測。子どもたちの65%は将来、今は存在していない職業に就くとの予測や、今後10年～20年程度で、半数の仕事が自動化されるとの予測、また2045年には人工知能が人類を越える「シンギュラリティ」に到達との指摘もある。このような中で、グローバル化、情報化、技術革新などの変化は、全ての子どもたちの生き方に影響するという認識での検討が必要である。

ここで問題にしなくてはならないのが、「教育はだれのものか」「教育の主体とは何か」。ここではOECDの教育の主体を示唆する資料とりわけ教科書はどのような位置づけか次の表を見てもらいたい。明確なことは教科書を教育行政が管理するのは日本と中国だけである。

2) 従来の教育体制・10年に一度の学習指導要領

現在の日本の教育は、欧米との比較が重要であった。教育体制は戦後教育の学習指導要領である。日本は教育のひずみが生じ、それを補強するものとして学習指導要領体制がある。極論すれば、子どもたちの教育が問題を生じてから改定である。しかし社会の変化の速度は50年前と画然の差異が生じている。このことを隣国の韓国の教育制度と比較してみたい。韓国の教育行政は日本と同様な体制（国家の教育課程）政策として実施した。戦後、アメリカの強力な影響下で両国の政策は現在もその形は類似している。しかしその改訂は1980年代、大きく変化した。日本は相変わらず、10年に1度に対し、韓国は改定の期間を大幅に短縮し実施した。ここで強調したいことはその改革の速度のちがいである。日本で「生活科」の実施は1989年。ところが韓国では、その1年前の1988年「賢い生活」で合科的な教科がすでに実施されていたのである。そこには日本の教育改革は10年に1度であるが、韓国ではその教育課程の改訂の速さが、ある時期から日本より早く進行した。今回の「コロナ禍」も日本政府の対応は遅れているといわざるを得ない。

***資料 崩壊する日本の学習指導要領体制**

日韓の教育行政の変遷（善元作成）	
<p><日本の教育課程 第1期></p> <ul style="list-style-type: none"> ・(1958～1960年)2年間 教育課程の基準の性格の明確化 (道徳時間新設、基礎学力の充実) ・学習指導要領(1968～)9年間 教育内容向上(「教育内容の現代化」) (時代進展に対応の教育内容導入) ・学習指導要領(1977～)11年間 ゆとりある学校生活の実現 	<p><韓国教育課程 第1期></p> <ul style="list-style-type: none"> ・1次教育課程の時期(1954-1963)10年間 教科中心教育課程成 ・2次教育課程の時期(1963-1973)10年間 生活(経験)中心教育課程 ・3次教育課程の時期(1973-1981)8年間 経験・学問・人間中心観点の統合
<p><日本の教育課程 第2期></p> <ul style="list-style-type: none"> ・(1989～改訂)9年間 社会変化に対応できる人間育成 (「生活科」の新設、道徳教育の充実) ・(1998～)10年間 基礎・基本で「生きる力」育成(内容厳選 「総合的学習の時間」新設) ・(2008～)10年間 授業時数増、小学校英語活動 	<p><韓国教育課程 第2期></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4次教育課程(1981-1987)6年間 経験・学問・人間中心観点の統合 ・5次教育課程の時期(1987-1992)5年間 自主的な人、創造的な人、道徳的な人 ・6次教育課程(1992-1997)5年間 21世紀を自主的、創意的、道徳的な育成 ・7次教育課程(1997-2007)10年間 児童・生徒中心教育、情報化、自律的、創意的。 ・2007年改訂教育課程(2007-2009)2年間 裁量活動活性化、学習負担軽減・統合教科堅持 ・2009年改訂(2009-2015)6年間
<p>現在</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(2020～?)10年間? <p>*2050年まで人が「身体」「脳」「空間」「時間」の制約から解放された社会の実現を目指す</p>	<p>現在</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「2015年改訂教育課程」(2015年公布・2017年9月施行)

小まとめ

教育課程は何か問題が生じ改定する。戦後の学習指導要領体制は、今終焉を迎えていると私は考えている。何が問題になっているのであろうか。今求められているのは、子どもを中心に据え、現実に即した、多様な教育実践の支援が重要性である。それぞれの教育現場で築く教育実践重視の学校創りで、この激動の転換期には哲学が必要である。

次にこの教育実践の前提には「教育の主体とは何か、教科書とは何か」ということにつながる。国別教科書制度比較対象表(文科省資料、善元作成)をみれば、愕然とする。これは新設の教科「道徳」実施に大きな影響を与える。日本の教科書検定は改悪され、現在のはほぼ国定に近いと言えなくはないほど、国の要請が強い。

3) 教育の主体はどこか・教科書とは何か

次の表には重要なことが明らかになる。初等教育を見る限り、教科書の採択の権限は多くのOECD諸国は教育現場の学校か、教師であるのに対し、教育行政が権限を持つのはほぼ日本、中国である。

国別教科書制度比較対象表

	初等教育教科書							
	発行 検定等					供給		
	発行		検定	認定	採択の権限	無償 給与	無償 貸与	有償
	国定	民間						
日本		○	○		教委	○		
アメリカ		○		○	学校		○	
カナダ		○	○		教委 学校		○	
イギリス		○			教師		○	
フランス		○			教師		○	
ドイツ		○	○		学校		○	
フィンランド		○			教師 学校		○	
韓国	○				学校？	○		
中国		○	○		省, 県, 教育行政機関			○
台湾	○	○	○		学校			○

このようなシステムの中で教科「道徳」が、なされるならば教育の本来の意味において非常に危ういといえる。ポストコロナの時代、各都道府県の知事の権限が強くなった。教育もしかり、もっと国から解放されて教育ができる機会は十分にあった。しかし、残念ながら実際はそうならなかった。子どもに教育を合わせるのではなく、教育制度に子どもを合わせようとした。

3 今、日本の教育は—ポストコロナ時代の教育—ポストコロナと民主主義について

ジャック・アタリと「民主主義」と日本（善元要約）

コロナ禍に対してNHKのインタビューでアタリが重要なコメントをしている。民主主義の問題である。

ETV 特集 「人類はこの危機を乗り切ることができるのか？」

歴史・経済学者ジャック・アタリ

・「コロナは民主主義を殺した。ネタニエフは選挙に敗れたが立法府を閉じ市民に家に留まる緊急命令を発した。これは独裁政権だ。」これにネタニエフの息子ヤイールが強く反発。「あなたは専門分野では尊敬されるが政治には愚かだ。そしてあなたの国イスラエルを憎んでいる」

*結局、国民から大きな反発を受け、ネタニエフ氏は議会の閉鎖を断念。

ハラリ氏インタビュー

「この時は非常に危険な瞬間でした。ウイルスの流行と戦う口実を使った政治的クーデター。実際、首相は「議員の健康を守るために議会を閉鎖する」と言う。幸いにも国民やメディアと対立する政党から大きな反発があり首相は閉鎖を撤回した。いま議会は再開され、非常時を乗り切るための大連立工作が進んでいる。コロナウイルスと戦うという口実の独裁制で、一人の人物に強大な権力を与えると、その人物が間違った時にもたらされる結果ははるかに重大なものになる。独裁者は効率が良いし迅速に行動できます。誰とも相談する必要が

ないからです。

ほかの手法を試すのでなく間違いをさらに重ね、責任を他の人に転嫁し、権力を強化する。民主主義に大切なのは政府が間違いを起こしたときに自らそれを正すこと。政府が間違いを正さない時に、政府を抑制する別の権力が存在するということだ。」

*これについておもしろいことがある。デモクラシーこれは外国の概念である。「デモクラシー」の語源は古代ギリシア語 *dēmokratia* で、「人民・民衆・大衆」などを意味する *dēmos* (デーモス) と、「権力・支配」などを意味する *kratos* (クラトス) を組み合わせ、「人民権力」「民衆支配」、「国民主権」などの意味である。しかし日本語の翻訳は「民主主義」であり、この「民」の字源は民の目を刺す、国民を政治から遠ざける、見えないようにするという支配者の側からつくられたものである。皮肉にも現代のコロナ禍に当てはまるような気がする。

まとめ 「おもしろくなければ学校じゃない」

1) 2015年7月、文科省の教育課程企画特別部会の「論点整理」(案)

「子どもたち一人一人は、多様な可能性を持った存在で、多様な教育ニーズを持つ。未来に向かい成長する子どもたちが、学びが持つ潜在的な力を洗練し、教員も力を発揮し、教室や社会で共に生き生きと活躍できるようにする」

「(学校の) 教育の場において、解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解ける力を育むだけでは不十分である。世界が加速度的に変化する中でも、社会的・職業的に自立した人間として、伝統や文化に立脚した高い志や意欲を持って、蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことができるよう、そのために必要な資質・能力を身に付けることが重要である」(2030年の社会と子どもたちの未来 (1) 社会の質的变化と学校教育の課題・要約)

2) 「学校は人に物を教うる所にあらず、ただその天資の発達を妨げずしてよくこれを発育するための具なり」福澤諭吉「文明教育論」「教育の文字ははなはだ穏当ならず、よろしくこれを発育と称すべきなり。かくの如く学校の本旨はいわゆる教育にあらずして、能力の発育にあり」

福澤の時代、当時「EDUCATION」の英語訳で大久保利通と福澤諭吉と森有禮が論争。その中で大久保は「教化」、福澤は「発育」が適訳といい、森有禮はその間で「教育」とした。明治の欧米の教育制度、文化を吸収すると考えられた時代、福澤は学校を教えるところではないと明言した。

まさに今問われているのは、詰め込み、教え込みの教育でない、子どもが教育の主体となる学校である。

『韓日合同教育研究会・日韓合同授業研究会 第25回 坡州交流会 報告書』(CD版)

「分断を超え平和な韓半島を夢見て」

「真の歴史・社会問題を伝えるために 公立学校教員になった理由」

「統一過程をドイツから学ぶ」 / 「分断暴力と脱分断」

「高校無償化の変遷と課題」 / 「なぜ訪朝するのかー私の教育学」ほか

≪申し込み方法≫ 送料共 500円(2枚以上の場合、要相談)

次のメールアドレス(遠藤)に送付先住所と名前をお知らせください。

ynktorajiroh@yahoo.co.jp 代金は12頁記載の郵便振替口座に振り込んでください。

清見寺あれこれ

川辺

その1 清見寺老大師 一條文昭さん

斉藤さんの企画で実現した「清見寺へ行こう」のFWの充実は、ガイドの伏見鑛作さんとの出会いがあったのであったことが、会報の報告でよくわかった。私が清見寺に行きたいと手を上げたのは、斉藤さんの旅への思いを聞いたこと、通信使の第2回学習会の後の高麗博物館の見学で、清見寺の存在感を感じられたこと、もう一つ、遠藤さんが紹介して下さった資料があった。

谷中のご自宅近くのお寺にあった小冊子「法光」(2018年3月1日発行)に載っていた、清見寺の一條文昭さんの「ご縁をいただき、出会いに助けられて」と写真家金井三喜雄さんの「朝鮮通信使を歩く」のコピーである。今回、清見寺の見学の最後に、海に見える「潮音閣」に上がり、座って伏見さんとお話する際、斉藤さんが机の上に、老大師の筆なる「瓊瑤(けいよう)世界」のコピーを拵げられた。身の引き締まる思いで窓から見える、実物の扁額を見た。

当日、寺にあった小冊子「臨濟宗妙心寺派静東教区花園会報」(2018年12月1日発行)に載った{禅を聴く「清見寺と朝鮮通信使一日韓兩國関係について考える」 清見寺一條文昭老大師}を読み、教えられることが多かった。両小冊子(寺の会報)とも、2018年発行で、「通信使」の関連資料がユネスコの「世界の記憶」に登録(2017年10月)された喜びと責任を受けての文章だが、前者は、ご自分が僧となり清見寺に入寺するまでの経過が書かれているのに対し、現地の会報は、題名にみられるように、清見寺と朝鮮通信使の深い関係を資料(寺で保存してきたものを研究者の協力を得て刊行)に基づいて述べられている。長くなるが、一部を紹介したい。

「清見寺と朝鮮通信使」

慶長12年(1607)江戸時代になって初めて日本国を訪れた通信使は、江戸で二代将軍秀忠公と謁見した後、帰路に清見寺に宿泊している。当時大御所として駿府城に在った家康公は破格ともいえる「おもてなし」で、一行を清見湖遊覧の舟遊びに誘った。通信使もまた行程を一日延長してこれに応えるのである。そして、三使はこの時の喜びを漢詩に詠み、家康に感謝の意を表している。三使の漢詩は板に彫られ、扁額として今でも本堂に掲げられている(民団新聞社の記者・朴光春さんが撮り、会報に載った写真に見える?)。おそらく、第1回目の通信使は、帰国後に清見寺での良き思い出を大いに語ったと思われる。少し大げさな表現かもしれないが、それ以降の通信使が行った文化交流は、清見寺での家康公の「おもてなし」から始まったといっても過言ではない。

地方の一寺院である清見寺が、江戸時代には「外交」の一端を確かに担っていた。通信使は、日本の清見寺に思いを寄せ、自国の先達が残した書に会うことを楽しみに清見寺を訪れた。そして、彼らもまた清見寺で次韻することで、両国の先人に対して深い尊敬の念を表している。清見寺と通信使は文化交流を重ね、日本と朝鮮の「平和」に大きな役割を果たしたのである。

「瓊瑤(けいよう)世界」 共に輝く世界

清見寺の鐘楼に「瓊瑤世界」という扁額が掲げられている。この扁額を気にとめる人は多くなく、まして意味を知っている人はどれだけいるのだろうか。実はこれは、1643年に清見寺を訪れた朝鮮通信使の製述官であった朴安期が書いた扁額である。「瓊」と「瑤」この二つの文字は、ど

ちらも光り輝く美しい玉であり、「瓊瑤世界」とは「光り輝く美しい世界」を意味する。

しかしその、真意は、「瓊」と「瑤」の美しい二つの玉が「日本」と「朝鮮」のことであることを知らなければならない。日本と朝鮮は、言葉も文化も異なっている。しかし、心の信^{まこと}をもつて相手を照らしあうことの大切さを説くものである。「日本」「朝鮮」という光り輝く二つの玉がお互いを照らし続けるならば、その光は増幅されてさらに輝くであろう。古人の言葉には、光り輝く素晴らしい両国関係への願いが込められているのである。

その2 清見寺について知ったこと

*日本の東と西を分ける関所が7世紀に設置され、関所の鎮護として仏堂が建立されたのがはじまり。

*山と海が迫り要害の地であったことは、何度も戦場になった。平将門には破られた。今川、武田、家康、秀吉の陣地になった。

*室町時代には、高僧が入寺する。足利氏の尊崇が篤い。

*徳川家康(竹千代)は、今川氏の人質になったとき、当寺に来て教育を受ける。

*徳川家康は終生、この地・この寺を愛し、三保の松原・清見湯の見える景勝の地を「おもてなし」の地とした。少し移動すれば、富士山も見える。

*琉球の具志頭(ぐしちゃん)王子の墓と「江戸上り」の塔参

1609年、薩摩は、琉球の島々を征服、首里城を4月1日開城した。5月半ば、尚寧王他百余名を薩摩に連行。王の弟である具志頭王子は、琉球と明に報告に行き、薩摩に戻る。

重臣の一人謝名利山は服属を拒否、処刑された。1610年、薩摩藩主と共に江戸へ向かう徒次、駿府城で大御所家康に会う。翌日、王子は亡くなり、清見寺で葬儀、埋葬された。国王一行は江戸で、将軍秀忠に会い、薩摩に戻る。薩摩の属国になる「15か条」を押しつけられ、1611年琉球に戻った。1644年～1850年「江戸上がり」という行列が17回実施された。「江戸上がり」とは、琉球の国王は代替わりごとに、その就任を感謝する謝恩使、将軍の就任祝いの慶賀使を幕府に遣わした。幕藩体制への服属儀礼である。一行は「異国風」を装い、島津氏に伴われて行った。100人位で構成されたが薩摩藩・島津氏が加わり1,000人を超える大行列となった。清見寺の略年表には琉球使節「塔参す」と記録されている。ただの休養ではなく、墓参りであった。島袋さんと一緒に、気がついたことである。

徳川幕府の「平和外交」は、東アジアの中心にあって交易で生きてきた琉球にとっては、実に残酷な支配を受けることであった。清見寺と街道行列の舞台は、明暗交錯するものであった。

その3 「道」といえば、南北の道もある。鉄道もある。海の道もある。

*東海道53次は、参勤交代のため、政治の道として整備され、宿場町・興津も発展した。本陣2軒、脇本陣2軒、旅籠34軒、その他316軒、1668人(天保14年)

*それ以前から、南北の街道・甲州往還・身延山久遠寺参詣の道が富士川沿いに開けてきた。富士川の舟便が甲州への物資輸送の要路。駿河の魚介類、興津・由比の塩、瀬戸内海の塩などを運んだ。「下げ米、上げ塩」と呼ばれた。下り荷は幕府への年貢米。

*幕末の1867年、「ええじゃないか踊り」東進。男女3～400人が蒲原辺りまで練り歩いた。

*明治22(1889年)、東海道線 国府津・静岡間単線開通。興津駅設置

海水浴客、保養地として政治家、文人、皇族が来る。別荘地（井上馨・伊藤博文・西園寺公望）などで賑わう。

*昭和 20（1945 年）空襲。

*昭和 36（1961 年）興津町、清水市に合併

（1962 年）興津埠頭工事始まり、清見潟没す

（2003 年）新興津埠頭（水深 15^{メートル}、8,000TEU 級コンテナ船に対応）の供用開始

清見寺見学の最後に通された潮音閣、お話が終わって立ち上がった時に見えた海岸の景色の異様さへの驚きが残った。

20 年前東京湾クルーズでみたコンテナの山を思い出した。さらに拡大した状況だ。21 世紀の大量輸送に対応するため、地球はどんどん改造されている。

みかんや、お茶、桜エビ漁と、穏やかな気候に恵まれた産地でもあり、海に親しみ生きてきた町は、旅籠から転じた旅館が 1 軒営業、脇本陣だった旅館は、ギャラリーになり、歴史を伝えている。元お茶問屋さんが開いているレストランはおいしかった。清見寺は韓国からの見学者が増えているという。

私も丁寧にとつながり、希望を見つけていきたい。

おまけ① 日本書紀によれば、百濟援助の軍船が清水港周辺で作られ、多くの軍兵が出陣したと推測される記録がある。

おまけ② 第 1 回通信使を家康が遊覧のもてなしをした際、南蛮船が 1 隻停泊していた、と朝鮮側は記録している。日本には記録がない。「南蛮船駿河湾来航図屏風」（6 曲 1 双）（九州国立博物館所蔵）が見つかったが、画面の内容に不明な点がある。

おまけ③ 旧幕府軍の乗った咸臨丸が難破して清水港に入ると、新政府側が砲撃し、乗組員多数を殺戮し、海中に投棄した。敵も味方もないと次郎長は救助し埋葬した。その記念碑が清見寺に立っている。

おまけ④ 鉄道唱歌

19、世に名も高き興津鯛 鐘の音ひびく清見寺
清水につづく江尻よりゆけばほどなく久能山

○ | ㄴㅎ | ㄴㅎ | ㄴㄷ | ㄴㅈ | ㄴㅊ | ㄴㅅ | ㄴㅇ | ㄴㅣ | ㄴㅑ | ㄴㅓ | ㄴㅕ | ㄴㅗ | ㄴㅛ | ㄴㅝ | ㄴㅟ |

〈 短 信 〉

「8 番線には特急ひたち仙台行きが入線します」。8 月 21(金)、上野駅ホームで電車を待っていた私は知ってはいたものの耳を疑った。

「復興」の証しとしての 3 月 14 日常磐線全線開通。「線量値が高くても命に関わるわけではない」と言わんがばかりに。

「東京五輪成功、復興、日本を取り戻す」。最長政権。そして「憲法改正」。許すまじ。

特急ひたちを眺めながら、酷暑、コロナ禍の中で冷や汗がとまらなかった。(E)

ウリ 123 号 2020 年 8 月 31 日

日韓合同授業研究会

代表 藤田